

[原著論文]

現代絵本における主人公の内面への旅を描く 絵本主題の記述的研究

——翻訳絵本と原書から複眼的に考える——

松本由美

要 約

絵本の時代的区分は様々であるが、概ね昔話や伝承物語を再話し絵をつけた昔話絵本、新たな物語を書き起こした現代の創作絵本に大きく分類することができる。創作絵本は様々な分類ができるが、どのくらい読み継がれているのかを目安として考えると、クラシックと呼ばれる名作絵本、初版から20年以上を目安とした定番になりつつあるロングセラー絵本、そして、現代絵本に分類される。現代絵本は、さらに近年の社会情勢や子ども観の変化にともないポストモダンの絵本が登場した。現代絵本の改革的作品としてモーリス・センダックを取り上げ、絵本作品に観られる子ども観の変化を、俯瞰したい。

キーワード：絵本、ポストモダン絵本、現代絵本、主題、子ども観、内面への旅

1. はじめに：絵本の多面性と多様性

1.1 絵本学の確立

絵本を文学や芸術から独立した学術研究対象として扱う絵本学会が1997年に設立されてから、24年を迎えようとしている。児童文学が学術研究分野として承認を得て1962年に学会が設立されてから60年を目前にしていることに比較すると、学問分野としての絵本学の若さが際立つ。しかし、往々にして大樹の一枝が、挿し木されると勢いを得て地下に深く広く根を張り、地上では豊かに枝葉を繁らせるように、絵本学も独立した学問分野として認知されると、新たな発展の場を得て、様々な周辺分野を巻き込んで伸展を続けている。

そもそも、絵本はその読者対象として児童を想定しているため、一般的に児童文学の一つのジャンルとして扱われることが多かった。したがって、当然の成り行きではあるが、その特徴を際立たせる要素である絵の存在から分析的考察が始まった。絵画とは異なった絵本の絵に、特異で現代的な分析を与えたのは“Looking at Pictures in Picture Books”(Doonan 1992)である

う。Doonan (1992) は、文学における読者の能動的解釈、即ち言語テキストを語彙、文、談話作品全体の各レベルにおいてそれぞれ、表層と深層において解読しながら能動的に解釈を与えることが求められているのと同様に、絵本においては、読者自らが能動的に、言語だけでなく絵に託された記号情報を読み込み、解釈していく必要があると唱えた。つまり、絵本における絵を、絵本における言語と同様に、テキストとして分析する立場である。そこでは、言語テキストを語彙、文、談話の3つのレベルにおいて、表層的、深層的に分析するのと同様に、絵本の絵についても、事物を描きだす色、形、線や質感といった要素分析が必要であり、さらに見開きに描かれる絵についての構成分析が必要である。そして、その各部分について表層的、深層的に解釈するのである。加えて、元より連続体である言語と異なり、一幅の独立した、一つの絵画として絵的解釈が可能である絵本の絵においては、複数の見開きに描かれる絵と絵の連続性が醸し出すもの、いわゆる間テキスト的な解釈が必要となる。絵本の絵は、この間テキスト性において、そもそも連続体である動画テキストとも、単体でのみ存在する一幅の静止画テキストとも、一線を画し特異であると言えよう。形状においても全体、部分、等々さらに分析構造を持ち、緻密な分析を伴う。Doonan (1992) は、絵の全体から細部に至るまでの構図や筆致、色、形、線や質感まで、どのように認知されるのか紐解き、これらを踏まえ絵本の絵が何を意図しているのか、具体的な絵本作品を例にとり解説している。現代の絵本分析には欠かせない、認知科学の知見を用いる絵の解読の道筋を示した一人が、Doonan (1992) であると言っても過言ではあるまい。

次に、絵本学に新たな見地を開いた研究の一つには、“How Picturebooks Work (Children’s Literature and Culture)” (Nikolajeva, Scott 2006) があげられるだろう。Doonan(1992) が示した、絵の中に仕込まれた精緻で複雑な情報を読み解き、絵にも自らの解釈を加えて読み進めることこそが絵本を読むことになるという考えは、決して言葉を排除したものではなかったが、絵本の絵と言葉という2つの要素に言及し、その2つの要素の関係性が述べられるには、さらに十余年の月日を待たなければならなかった。Nikolajeva, Scott (2006) は、絵と言葉の関係性を分析分類した。それによると絵と言葉は相互に補完し合っているだけでなく、「対称・重複」「補完」「敷衍・増強」「対立・矛盾」といった4つの関係に分けることができるとした。

1.2 絵本に内在する多面性と周辺領域への拡充

また、絵本研究は前節にあげたような絵本の表現形態としての側面からだけでなく、絵本が内在的に希求する人との関わりからの側面からの研究も進んでいる。絵本が希求する人との関わりとは、大きく2つある。一つは絵本が形状的に、前提としている人の手による捲りである。もう一つは、絵本が通常、子どもたちが文字の読めない時期に、周囲の大人によって読み聞かせを行うため生じる読み聞かせという行為である。読み聞かせには自ずと、声の交感があり、さらに、視線の交錯、表情の交換、が生じ、それによって絵本は、文字の読めない幼少期から、

読み聞かせによって人間の認知に影響し、情報を伝えていることになる。そのため、絵本の読み聞かせに関する研究は、発達心理学の分野において進展が目覚ましく、例えば斎藤・内田(2013)や、石川他(2018)等では、絵本の読み聞かせに関わるすべての人間、即ち絵本の読み手と聞き手について、個々の心情や時には人格形成にまで影響を及ぼすこと、また読み手と聞き手の関係性を変化させることを、発達心理学の知見を用いて説明している。ここでは、絵本は何らかの変化を起こす媒介(メディア)として解釈分析されている。

また、斎藤・内田(2013)石川他(2018)等は、絵本読み聞かせの聞き手だけでなく、聞き手の反応によって読み手も大きく影響を被ることを主張しており、それを踏まえて、絵本の「読み聞かせ」という一方通行をイメージさせる語彙ではなく、絵本を介して相互に影響し合う双方向を想定した「読みあい」という用語を用いている。本稿でも以降必然性がない限り「読み聞かせ」ではなく、「読みあい」と言及する。

1.3 絵本表現の広がりテーマの多様化

絵本学の進展拡大を支えるものは、まず何より近年の目覚ましい絵本の多様性であろう。その絵本の多様性は、絵本というメディアの特徴である多面性によって増幅されている。多面的である絵本の要素が、個々に多様化していて、等比級数的に絵本が多様化するの必然であるが、多文化共生社会に向かう今日的な社会の動向が、絵本の多様化をも後押ししているのは、間違いない。

ここで、多様化の議論を進める前に、その核となる絵本の定義を仮定しておきたい。まず「何らかのストーリー性を持った複数の絵(視覚情報)とことば(言語情報)を一つの集合体にしたもの」と、措定してみよう。絵本という名称が語るように、絵があり、ことばがある。さらに、本の形状、つまり複数枚のページが綴じられている。つまり捲りを前提とする一つの集合体である。近年広がりを見せる絵本が想定する対象読者層は赤ん坊から老人にまで広く及ぶが、本稿では読み聞かせを想定できる乳幼児から児童を対象として考える。絵本は読み聞かせという聴覚情報を内包することになる。さらに、読み手が自らの声を使って絵本の言語情報を読む、聞き手はその言語音を聴覚情報として、絵本の視覚情報とともに受け入れる。さらに聞き手はそれに対して無反応も含めた何らかの反応をする。この聞き手の反応から、読み聞かせる大人は影響を受けるという繰り返しである。

まず、近年一つのジャンルを形成しつつある「字のない絵本」は、絵本ではないのかという疑問がすぐに生じる。日本の読者にも有名な『りんごとちょう』(ほるぷ出版1976年)を皮切りに『あかいふうせん』(ほるぷ出版1976年)『木のうた』(ほるぷ出版1977年)をはじめとしたイエラ・マリの連作は、字のない絵本を広めた。近年の作品は、韓国出身のスージー・リーの『なみ』(講談社2009)や『せん』(岩波書店2018)、またデイヴィッド・ウィズナーの『かよのよる』(徳間書店2000)、『漂流物』(BL出版2007)はいずれもコルデコット賞を受賞し

ており、評価の高さに間違いはない。1970年代のイエラ・マリから、現代もスージー・リーやデイヴィッド・ウィズナーなどに至るまで、複数の絵の連続でストーリーを表現する文字無し絵本は、表現方法の可能性を追求する絵本作家たちの創作意欲を掻き立てるようだ。

しかし、近年絵本を構成する要素の中で最も多様化しているものは、恐らくその主題であろう。これまで、絵本の主題としては取り上げられてこなかった環境問題や、性の多様性、貧困など持続可能な開発目標、いわゆるSDGsに掲げられる現代社会の問題も、子どもたちを取り巻く社会問題としても認識されるようになるにつれて、絵本の主題として取り上げられるようになってきた。取り分けこれまでタブー視されてきたセクシュアルマイノリティーの問題においては、美しい絵と受容する優しさを祖母の目を通して物語にしたことで、センセーショナルな旋風を巻き起こしたジェシカ・ラブによる“Julian is Mermaid” (WALKER BOOKS 2008)が秀逸である。日本でも『ジュリアンはマーメイド』(サウザンブックス社 2020)として、程なく邦訳出版され、日本の子どもたちも手に取りやすくなった。こうした、ある意味直接的に言及することがはばかれる、さりとて決して避けて通ることができない問題は、絵本が得意とする分野であろう。絵本という媒体は、真実を損なうことなく、作家が伝えたい主題を昇華し、子どもを主人公にして情報を物語化することにより、子どもたちに情報を伝わりやすくすることができる。また、作家の目を通して情報を視覚化して、真実をより訴えやすくすることが可能であるからだ。こうして、子どもたちも無関係ではいられない問題こそ、絵本に取り上げて、考えさせ向き合わせようとする傾向が顕著に感じられる。

こうした大人目から見た深刻な社会問題や、タブー視される人の内面の問題は、子どもたちにとっても、決して無関係ではなく、子どもにとっても複雑で、深刻な問題であるはずだ。こうした、現代の子ども観が、絵本出版にも反映され、子どもの内面に子ども自身が向き合う絵本も見られるようになった。本稿では、子どもの内面を描き、こうした現代絵本への扉を開いたと評される、モーリス・センダックの『かいじゅうたちのいるところ』をまず取り上げ、ときに原書にも注目し、原書と邦訳の両者を取り上げることで複眼的に、絵本の諸相を分析することを試みたい。

2. 現代以前の絵本の物語構造と子ども像

現代以前の絵本の主流は、子どもが主人公となり実際に何らかの冒険をして、ある種の困難を乗り越えて成長を遂げる成長物語としての絵本であった。日本では今でも子どもたちに大いに人気のある、『ぐりとぐら』(中川李枝子・大村百合子, 福音館書店 1967) やその連作シリーズも同様であるし、『こんとあき』(林明子, 福音館書店 1989) やその代表作の一つとされる『はじめてのおつかい』(筒井頼子・林明子, 福音館書店 1977) など、林明子の作品も同様である。それは、「行きて帰りし物語」つまり、広義の冒険に出かけて、何らかの困難に遭遇し、それを乗り越えて、成長して、戻ってくる冒険物語とも、成長物語とも言われる一大ジャンルであ

る。絵本で子どもたちの冒険物語、あるいは成長物語を描くというトレンドは、決して当時に始まったことではない。日本昔ばなし、例えば桃太郎などもその典型であるし、あかずきん、七ひきのこやぎなどのグリム童話も多くは、何らかの取り組むべき課題（冒険）に見舞われ、そこで出会う困難を乗り越えながら成長することにより、最後に変化（成長）を遂げた姿が描かれている。『こんとあき』や『はじめてのおつかい』に代表される林明子の絵本作品や、『ぐりとぐら』を大ベストセラーとする中川李枝子・大村百合子の絵本作品が生み出されたころは、この成長物語が主流だったとみてよいであろう。また、前述の絵本作家の作品が、英語、中国語、韓国語、タイ語、フランス語など、多くの言語に翻訳され、国の内外で高く評価されていることから、成長物語としての児童絵本は日本だけの傾向ではなく、世界の児童絵本に受け入れられていた物語構造だと言えよう。そして、絵本を生み出し、買い求めるのも大人であるから、ここに描かれる子ども像、すなわち、困難を乗り越え、成長する子どもが、当時の大人に求められていた子ども像であることを知ることができる。

3. 児童絵本のパラダイムを変えた『かいじゅうたちのいるところ』

3.1 2つの邦訳版

こうして昔話から長きに亘り児童向け絵本のパラダイムであった「行きて帰りし物語」を大きな変革をもたらして、現代絵本への扉を開いたのが、『かいじゅうたちのいるところ』であることは、誰しも認めるところであろう。原作である“Where the Wild Things are”については、今なお数多くの研究がなされているので、ここでは原作と邦訳版を合わせてみながら、作品とそれを取り巻く日米両国の時代のコンテクストに言及するにとどめる。

原作の“Where the Wild Things are”が本国アメリカでの初版は1963年、その翌年1964年にアメリカの児童図書館協会（Association of Library Service to Children: ALSC）によって、アメリカで発行された優れた絵本に与えられるコルデコット賞を受賞している。本国はもとより、今では、この賞を受賞した作品の多くがすぐさま翻訳されるくらい権威ある賞であるから、アメリカでは発売当初から評価され、注目を集めていたことが分かる。また、専門家の間で評価されているだけでなく、大手通販サイトAmazonのComics & Graphic Novel History & Prices部門（絵本はGraphic Novelとして分類される）では現在でもベストセラー第1位を誇り、一般読者にも人気であることがわかる。また、邦訳版の『かいじゅうたちのいるところ』も研究者や専門家だけでなく、一般の人々に至るまで、恐らく何らかの形で絵本を買い求めようとする程度の関心があれば、知っていると思われるくらい、知名度の高い絵本であろう。ところが翻訳家・研究者として名高い神宮輝夫氏の名訳によって富山房から出版されたのは、この“Where the Wild Things are”が出版されてから10年以上が経過した、1975年のことであった。実は、原作“Where the Wild Things are”の発行から3年後の1966年に、ウエザヒル翻訳委員会

の手により邦訳され、『いるいる おばけがすんでいる』という題名でウエザヒル出版から出版されている。ウエザヒル出版のものは現在では絶版の様で、やや入手困難であるので、ネット上で検索可能な書影と、書誌情報から確認できる題名について言及するにとどめる。

2つの翻訳版の題名の付け方を比較してみると、『かいじゅうたちのいるところ』（神宮輝夫訳 富山房 1975）の方が、『いるいる おばけがすんでいる』（ウエザヒル翻訳委員会 ウエザヒル出版1966）より、原題に寄せながら上手く日本語として過不足ない情報を与えている。“Where the Wild Things are”の冒頭には‘the place’（ところ）が省略されているが、日本語では、「かいじゅうたちのいる」の後に続く名詞を特定しなければならない。そこで、‘the place’にあたる日本語として「ところ」を補っている。一方英語では文法構造上、この関係副詞を導く‘Where’の直前には‘the place’という語句が入ることは必須であり、文言化されていなくても、相互に理解される。むしろ、正しく言い切ってしまう安定することを避けて、欠落させることにより、ここには‘the place’が来るはずという期待感と同時に本来あるべきものを欠落させることによる不安定さが、裏拍のようなりズムを生み出す。“Where the Wild Things are”という絵本作品が、20世紀児童絵本の最高傑作と言われる所以は、子どもの心の内奥や彼らの葛藤を題材として焦点化したその画力や絵本構成力だけでなく、それらに見事に同調し、効果を増幅させている原作者センダックの鋭い言語感覚があることを指摘しておきたい。

3.2 あらすじ：『かいじゅうたちのいるところ』

主人公のマックスはおおかみの着ぐるみを着て今日もひと暴れ。とうとう、おかあさんから夕食抜きを宣告される。ところがマックスはへいっちゃら。自分の部屋で目をつぶる。すると、部屋の中には草木が伸びて伸びて、また伸びて、いつの間にか家具も消えて、そこはつたの絡まるジャングル。そして船に乗ってたどり着いたのが“Where the Wild Things Are”，かいじゅうたちの棲む島である。直ぐに王となったマックスは彼らを従えて、我が物顔でやりたい放題。一晩中踊ったり、木にぶらさがって遊び、しまいにはかいじゅうに肩車をさせて行進。でも、すぐになんとか寂しく、そして我が家に帰りたくなってきた。その我が家は‘where someone loved him best of all’、つまり「自分のことを誰よりも愛してくれる、そんな誰かさんのいるところ」。するとどこかから夕ご飯のいいにおいまでできて、また長い航海を経て戻ったマックスは、自分の部屋に夕ご飯をみつけるのである。まだ温かく、マックスは優しい気持ちに戻る。

‘wild’という単語のニュアンスは、この絵本を読むと分かりやすいのではないだろうか？マックスはどこにでもいる男の子であること、ひょっとするとこの本を読み聞かせている大人自身かもしれないと思わせられる。

3.3 現代版「行きて帰りし物語」

この物語は、児童文学に新しい扉を開いてはいるが、主人公のマックスには児童文学の常とう手段である冒険をさせていて、その意味では従来からある物語構造の行きて帰りし物語、または冒険物語とも言える。さらによく読むと、このかいじゅうたちのいるところに出かける冒険は、実はマックスの空想の中で起きた事で、彼の体は、お母さんにお仕置きとして閉じ込められた子ども部屋から一步も出てはいないのであり、実は、空想の中での大冒険が始まるが、絵本を読み聞かせる大人にはこれがマックスの心の旅であることが分かる。しかし、空想と現実の境界を大人のように持たない子どもたちは、このマックスの旅を本当の冒険として共有できるのであろう。さてマックスは船に乗り何日もかけて「かいじゅうたちのいるところ」に到着して、ついに怪獣を従える王様になる。かいじゅうを支配下においたマックスは、やがてかいじゅうたちを支配する王であっても、なお埋めることのできない寂しさを覚え、彼を愛する人の存在を再確認するという成長を遂げている。従って、この物語を、ある意味成長物語として読むことも可能である。

しかし、『こんとあき』との決定的な違いは、実はマックス自身が自分の心の内奥に潜むかいじゅうに向かって旅をして、その存在に気づいているところである。心に潜むかいじゅうは、マックスだけでなく子どもも大人も、人間ならば誰しもが抱えているものである。日頃上手く折り合いをつけたり、目を背けたりしている大人はかいじゅうの存在を忘れがちであるが、この物語は大人にもかいじゅうの存在を思い出させてくれる。子どもにとっては時々暴れ出す心の中の荒れ狂う気持ちに、この物語がかいじゅうという名前を与えてくれ、さらに、恐ろしいようでいてどこか親しみを覚えられる姿に視覚化してくれている。子どもたちも心の内に潜むかいじゅうと折り合いをつけようとしていること、そうして心の成長も遂げていくことも大人に教えてくれるであろう。

この作品の中の複数のかいじゅうは、それぞれいったい何を表しているのか、またかいじゅうたちはなぜこのような様相をしているのか、ということも様々に議論をされている。ここで本稿の論旨に関わるであろう、表紙に描かれた一匹のかいじゅうについて考察を深める。

3.4 主人公不在の表紙画像とかいじゅうの役割についての考察

絵本翻訳の特徴の一つは、当たり前だが視覚情報である絵は変えられないということである。その中でも表紙の画像は、絵本作家としても特に重要な部分であり、熟慮の上決定するそうである。その結果、往々にして絵本のもっとも重要な核心部分を象徴するページの絵を再掲するか、もしくはそうした画像を新たに書き起こす。当然の帰結として、主人公が何らかの形で表紙の画像に登場する。しかし、“Where the Wild Things Are”では主人公のマックスは、表紙に描かれず、中扉に表紙のかいじゅうとは異なる2匹のかいじゅうとその姿を現す。表紙のかい

じゅうは、他のかいじゅうとは一線を画した様相や振る舞いを見せている。何より、くるぶしから下は人間の足そのものであるし、第14見開きでは、マックスを肩車し、第11見開きでは、1人マックスを諫めるような表情を見せる。このかいじゅうはマックスの父親ではないかというのが大方の解釈である。その真偽のほどはここでは議論にしないが、いずれにしても他のかいじゅうとは異なる役割を背負っているに違いないことが絵からわかる。子どもが初めて電車に乗る時、思わずそっと後ろからついて行かずにはいられない保護者のような気持ちで、マックスのかいじゅうたちのいるところへの旅を見守っているかのようである。

ところで、表紙の絵にはなぜ前述の足首から下が人間の足であり、実はマックスの父親であると評されるかいじゅうだけが描かれて、マックスは不在なのであろうか。何らかのメッセージを持つことは確実であるが、この表紙画像と同じものは物語の中には登場しないので、絵本を解釈しながら想像してゆくしか方法が無い。第1章で述べたDoonan (1992) のように本来は要素を詳細に分析しなければならないが、今回は主人公の不在という絵の構成からのみ考察してみる。表紙画像の背景はかいじゅうたちのいるところであり、穏やかな水面にはマックスが乗って来たヨットが停泊している。月の明かりに照らされた明るい星空が描かれていて、ここに一匹だけ描かれているかいじゅうは、頬杖をついて眠っているように見える。時系列を考えると、このかいじゅうが遠くからヨットに乗ってたどり着き、ヨットを降りて眠りについて見えるのである。このかいじゅうは父親でもあり実はマックス自身でもあるというのが一つの解釈。もう一つは、父親も実はここに描かれているようなかいじゅうを心に持ち、時折こうして旅に出てかいじゅうとの折り合いをつけているという解釈も成り立つであろう。子ども心の旅が主題とするならば、前者の解釈を取りたいところである。

そして、最後にマックスを現実の世界に引き戻すのは、嗅覚であった。しかけ絵本の中には、物理的に絵本に香りを付けたものがあるが、通常は絵本では使わない嗅覚が急に刺激され、マックスともどもはっと我に返るような感覚である。

Then all around from far away across the world
 he smelled good to eat
 so he gave up being king of where the wild things are.

そして、1行目の「はるか彼方から」の表現にもセンダックの巧妙な言語遊びがうかがえる。‘all around’, ‘far away’, ‘across’ とその後の ‘the world’ にそれぞれ単体で掛かり結びできるものを3つも重ねていることで、意味だけでなく、物理的にも文が長くなり、「はるか彼方」という距離を表すことに成功している。絵本を見ている我々読者のところにも、はるか彼方からではあるが、確かなんだかとても美味しそうな匂いがしてくるのである。やはり嗅覚というのは、五感の中でも強いインパクトを持った感覚であることを実感できる。

3.5 翻訳版に観る時代の変化

次に2つの翻訳版と時代の成熟について述べておきたい。ウエザヒル版は、『いるいる おばけがすんでいる』という主語述語の揃った文であり、叙述が完結している。完結するということは、落ち着きをもたらすと同時に、「それが、どうなったのか」あるいは「それが、何なのか」という疑問が湧くことを止めてしまう。一方『かいじゅうたちのいるところ』は、名詞句であり主語なのか述部の一部なのかも分からず、読まずにはいられない。この文構造のある意味欠落をもたらす落ち着きのなさ、つまりページを開かずにはいられない不安定さが、多くの読者を物語に誘う。

4. まとめ：「行きて帰りし物語」から内面への旅へ

これ以前の絵本に内面的な問題が取り上げられてこなかったのは、日本の絵本だけではなく世界的な流れであったと思われる。また子どもたちが自身も内面で成長を遂げていなかった訳でもなく、『かいじゅうたちのいるところ』の主人公マックスが心の奥底に出現させた言いようのない怒りや、もやもやした何とも形容し難い感情を、それ以前の子どもたちが感じていなかった訳では決してない。子どもたちは、いつの時代にも、同様に真摯に生き、時に大人の目線から見ると小悪魔のようにふるまっているのである。そうした子どもたちのふるまいを彼ら自身の内面の波立ちや葛藤と捉えるためには、人間観、児童観の変化をもたらす認知科学の発展を待たなければならなかった。ピアジェによって子どもたちは、生物学的に成長すると同時に、その成長の過程で外界内界の認識についても日々刻々と成長を遂げていることが提唱され、今ではそのことを疑う者はないであろう。今では、この世に生を受けたその時から、成長を遂げていることが分かってきていて、赤ちゃんを総合的に研究する赤ちゃん学という研究領域に出会うことも少なくない。こうした学問的発展を軸に、赤ちゃん絵本というジャンルが確立され、赤ちゃんは生まれた瞬間から学び続けているということを支えにしながら、発展し続けている。

同様に、子どもだからと言って、決して避けては通れない、様々な問題、特に表面的には見えにくい、内面の問題を描く絵本が今後も登場することであろう。大人も子どもも、自己の内面と向き合わなければならないことは、いつの時代も変わらない。絵本はこれからも、内面に向き合う子どもと、そうした子どもを受容する大人の支えになっていくことであろう。

参考文献

- Doonan, Jane. "Looking at Pictures in Picture Books." Thimble Press, 1992.
石川由美子, 水谷勉, 仲野みこ, 斎藤有「絵本の読み合い遊びが育てる大人と子どもの「関係」発達

- その実証的検討』『宇都宮大学教育学部研究紀要』68, 宇都宮大学教育学部, 2018, 73-84
- Nikolajeva, Maria. Scott, Carole. “How Picturebooks Work (Children’s Literature and Culture).”Routledge, 2006.
- 斎藤有, 内田伸子「幼児期の絵本の読み聞かせに母親の養育態度が与える影響—「共有型」と「強制型」の横断的比較」『発達心理学研究』24 (2), 発達心理学会, 2013, 150-159
- Sendak, Maurice. “Where the Wild Things Are” Harper Collins, 1963, (renewed 1991, 『いるいる おぼけがすんでいる』ウエザヒル翻訳委員会訳, ウエザヒル出版, 1966).
- センダック, モーリス『かいじゅうたちのいるところ』じんぐうてるお訳, 富山房, 1975.

Descriptive Analysis on #OwnVoices in Modern Picture Books

Yumi MATSUMOTO

Abstract

Modern picture books vary rapidly in many respects including form, style, and theme. In particular, the developing of new materials, the progress of printing technique and a trend of multicultural education, provide freedom of selecting artistic style and topics expressed in the picture books. In these days, many picture book author concentrate on the introspection of children which leads to the state of maturing emotionally and mentally as a human being.

Maurice Scndak is the one who opened the door of the picture books to the such an introspection which is thought to be indispensable to maturation of children towards adults. Sendak has expressed changing feeling of the protagonist with the wild things in his mind, which made an epoch of the style of expression describing dialogue between protagonist and his/her inner mind called #OwnVoices, It has opened adults eyes also to the reality of children.

Keywords: picture books, post-modern, modern picture books, theme, #ownvoices